

◎ 美術館情報

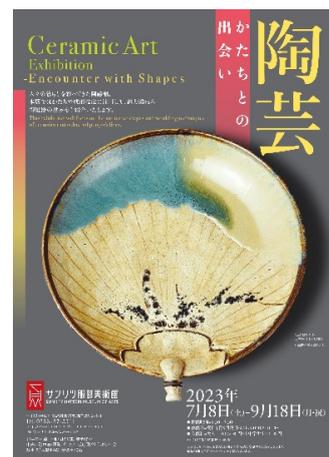
最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

1. サンリツ服部美術館【長野・諏訪】(<http://www.sunritz-hattori-museum.or.jp/schedule/main.html>)

7月8日(土)～9月18日(月・祝)

企画展：陶芸 かたちとの出会い

陶磁器は土や粘土をこねてかたちをつくり、焼き固めたものです。起源はいまだ明らかになっていませんが、古くは煮炊きのための鉢や貯蔵用の壺といった日用雑器が作られていました。その後、文明の発展とともに、素地の性質や用途に合わせた成形方法が次々と開発され、風土や時代の流行をかたちに取り入れた陶磁器が多く製作されるようになります。多種多様なうつわからは、道具としての使いやすさだけでなく、暮らしを彩るために陶磁器に美を追い求めた人々の姿も伺えます。本展では、当館の所蔵品のなかから約40点の陶磁器を展示し、かたちや成形技法についてご紹介します。

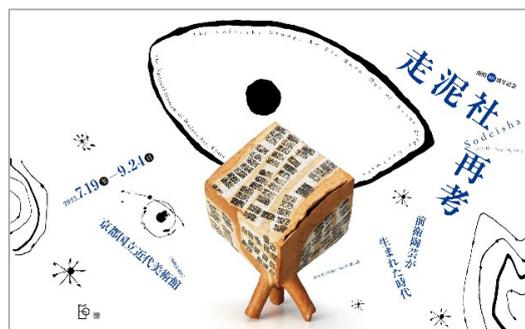


2. 京都国立近代美術館【京都・左京区】(<https://www.momak.go.jp/Japanese/exhibitionarchive/2023/454.html>)

7月19日(水)～9月24日(日)

企画展：開館60周年記念 走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代

1948年に八木一夫、叶哲夫、山田光、松井美介、鈴木治の5人で結成された走泥社は、その後、会員の入れ替わりを経ながら50年間にわたり、日本の陶芸界を牽引してきました。走泥社という団体の功績について一言で述べるとすれば、いわゆる「オブジェ焼」を世間に認知させたということになります。本展は走泥社の活動に焦点を当て、その意義や意味を再検証するものですが、50年という走泥社の活動期間全体を見渡した時、日本陶芸界におけるその重要性は特に前半期に認められます。というのも、1960年代半ば



以降、例えば1964年の現代国際陶芸展を皮切りに海外の動向が日本でも紹介されるようになり、走泥社が時代の中で有していた「前衛性」は次第に相対化されていくからです。そこで本展では、走泥社結成25周年となる1973年までを主な対象とし、走泥社と同時期に前衛陶芸運動を展開した四耕会など走泥社以外の作家等も一部交えつつ、前衛陶芸が生まれた時代を振り返ります。

3. 滋賀県立陶芸の森 陶芸館【甲賀・信楽】(<https://www.sccp.jp/exhibitions/17713/>)

7月15日(土)～12月17日(日)

特別展：「岡本太郎 アートの夢—陶壁・陶板・21世紀のフィギュア造形」～大衆にじかにぶつかる芸術を～



芸術家・岡本太郎は、「一般大衆にじかにぶつかる、社会に開かれた芸術を実現したい」と記し、1952年に初めてのパブリックアートとなるモザイクタイルを手掛けました。1954年には、量産を目指し粘土で《犬の植木鉢》を常滑で制作、その後刈谷でも類似の造形を手掛けました。1963年に信楽で制作された《坐ることを拒否する椅子》は、人と直に触れ合うアートの在り方を探り、代表作として全国に多数存在しています。本展では、〈芸術の大衆化〉をテーマに、近代の建築装飾陶器、パブリックアートや量産品のデザインを手掛けた岡本太郎らの作品を紹介します。